

A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

2

森 鷗 外(一)

中央公論社

日本の文学 2

©1966

森 鷗 外 (一)

昭和 40 年 12 月 24 日初版印刷

昭和 41 年 1 月 5 日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 丁目 1 番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

舞姫	7
うたかたの記	24
文づかい	39
半日	53
追難	69
魔睡	74
牛タ・セクスアリス	88
鶏	151
金貨	171

青年	186
ル・パルナス・アンビュラン	317
普請中	328
花子	333
あそび	338
妄想	349
雁	363
百物語	440
不思議な鏡	452
藤棚	462
羽鳥千尋	470

余興

予が立場

歴史そのままと歴史離れ

空車

なかじぎり

注解

解説

年譜

口絵

挿画

「うたかたの記」

三島由紀夫

小堀四郎

小堀四郎

483

487

490

494

497

499

530

543

森
鷗
外
(一)

舞姫

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静かにて、熾熱燈の光の晴れがましきもいたずらなり。今宵は夜ごとにここにつどい来るカルタ仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。

五年前のことなりしが、平生の望み足りて、洋行の官命をこうむり、このセイゴンの港まで来しころは、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆に任せて書きしるしつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、きょうになりておもえば、おさなき思想、身のほど知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさえ珍しげにしるしとき、心ある人はいかにか見けん。こたびは途に上りしとき、日記ものせんとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、ドイツにて物理学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけん、あらず、これには別に故あり。

げに東にかえるいまの我は、西に航せし昔の我ならず、學問こそなお心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言うも更なり、われとわが心さえ変りやすきをも悟り得たり。きのうの是はきょうの非なるわが瞬間の感觸を、筆に写して誰にか見せん。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

ああ、プリンジシイの港を出でてより、はや二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさえ交わりを結びて、旅の憂さを慰めあうが航海の習いなるに、微恙にことよせて房のうちにのみ籠りて、同行の人々にも物言うことの少きは、人知らぬ恨みに頭のみ悩ましたればなり。この恨みは初め一抹の雲のごとくわが心をかすめて、スイスの山色をも見せず、イタリヤの古蹟にも心をとどめさせず、中ごろは世をいとい、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいうべき慘痛をわれに負わせ、いまは心の奥に凝り固まりて、一党の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に應ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を喚び起して、いくたびとなくわが心を苦しむ。ああ、いかにしてかこの恨みを銷せん。もしほかの恨みなりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなん。これのみはあまりに深くわが心に彫りつけられたればさはあらじと思えど、

今宵はあたりに人もなし、房奴の来て電氣線の鍵をひねるにはなおほどもあるべければ、いで、その概略を文につづりてみる。

余は幼きころより厳しき庭の訓えを受けし甲斐に、父をば早く喪いつれど、学問のすさみ衰うることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でて予備養に通いしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎という名はいつも一級の首にしるされたりしに、一人子の我を力になして世をわたる母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりそのころまでにまたなき名譽なりと人にもいわれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎え、樂しき年を送ること三とせばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、わが名を成さんも、わが家を興さんも、いまぞとおもう心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るをもさまで悲しとは思わず、はるばると家を離れてベルリンの都に來ぬ。

余は模倣たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこのヨオロッパの新都の中央に立てり。なんらの光彩ぞ、わが目を射んとするは。なんらの色沢ぞ、わが心を迷わさんとするは。菩提樹下と詠するときは、幽靜なる境なるべくは思われるれど、この大道髪のごときウンテル、デン、リンデンに來て兩辺なる石だ

たみの人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩そびえたる士官の、まだウィルヘルム一世の街に臨める窓に倚りたもうころなりければ、さまざまの色に飾り成したる礼装をなしたる、妍き少女のバリーまねびの粧いしたる、彼もこれも目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろいろの馬車、雲にそびゆる樓閣の少しとぎれたるところには、晴れたる空に夕立の音を聞かせてみなぎり落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門をへだてて緑樹枝をさし交わしたる中より、半天に浮かびいでたる凱旋塔の神女の像、このあまたの景物目睫の間にあつまりたれば、はじめてここに来しものの応接にいとまなきも宜なり。されどわが胸にはたといかなる境に遊びても、あだなる美觀に心をば動かさじの誓いありて、つねに我を襲う外物を遮りとどめたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おおよけの紹介状をいだして東來の意を告げしプロシヤの官員は、みなこころよく余を迎え、公使館よりの手つづきだに事なくすみたらましかば、何事にもあれ、教えもし伝えもせんと約しき。喜ばしきは、わが故里にて、ドイツ、フランスの語を学びしことなり。彼らははじめて余を見しとき、いづくにていつのまにかくは学び得つると問わぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとに、かねておおよけの許しをば

得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めんと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過すほどに、おおよけの打ち合せもすみて取調べも次第にはかどり行けば、いそぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写しとどめて、ついには幾巻をかなしけん。大学のかたにては、おさなき心に思い計りしがごとく、政治家になるべき特科のあるびようもあらず、これかかれかと心迷いながらも、二三の法家の講筵につらなることにおもひ定めて、謝金を取め、往きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらん、余は父の遺言を守り、母の教えに従い、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びしときより、官長のよき働き手を得たりと褒めますが喜ばしさにたゆみなく勤めしときまで、ただ所動的、器械的の人物になりてみずから悟らざりしが、いま二十五歳になりて、すでに久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心のうちなにとなくおだやかならず、奥深くひそみたりしまことの我は、ようよう表にあらわれて、きのうまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余はわが身のいまの世に雄飛すべき政治家になるにもよろしからず、またよく法典をそらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさわしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余はひそかに思うよう、わが母は余を活きたる辞書となさんとし、わが官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらんはなお堪うべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。いままでは瑣々たる問題にも、きわめて丁寧にいらいえしつる余が、このころより官長に寄する書にはしきりに法制の細目にかかずろうべきにあらぬを論じて、ひとたび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言しつ。また大学にては法科の講筵をよそにして、歴史文学に心を寄せ、ようやく蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のままに用いるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想をいだきて、人なみなぬ而もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危うきは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なおわが地位をくつがえすに足らざりけんを、日ごろベルリンの留学生のうちにて、ある勢力ある一群れと余との間に、おもしろからぬ関係ありて、かの人々は余を猜疑し、またついに余を讒誣するに至りぬ。されどこれとてもその故なくてやは。

かの人々は余がともにビールの杯をも挙げず、球突きのキューをも取らぬを、かたくななる心と欲を制する力とに帰して、かつは嘲りかつは嫉みたりけん。されどこれは余を知らねばなり。ああ、この故よしは、わが身だに

知らざりしを、いかでか人に知らるべき。わが心はかの合歓くわくわんという木の葉に似て、物触れば縮みて避けん」とす。

わが心は処女に似たり。余が幼きころより長者の教えを守りて、学びの道をたどりしも、仕えの道をあゆみしも、みな勇氣ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みなみずから欺き、人をさえ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一条にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を棄ててかえりみぬほどの勇氣ありしにあらず、ただ外物に恐れてみずからわが手足を縛せしのみ。故郷を立ち出する前にも、わが有為の人物なることを疑わず、またわが心のよく耐えんことをも深く信じたりき。ああ、彼も一時。舟の横浜を離るるまでは、あっぱれ豪傑と思ひし身も、せきあえぬ涙に手巾を濡らしつるをわれながら怪しと思ひしが、これぞなかなかわが本性なりける。この心は生れながらにやありけん。また早く父を失いて母の手に育てられしによりてや生じけん。

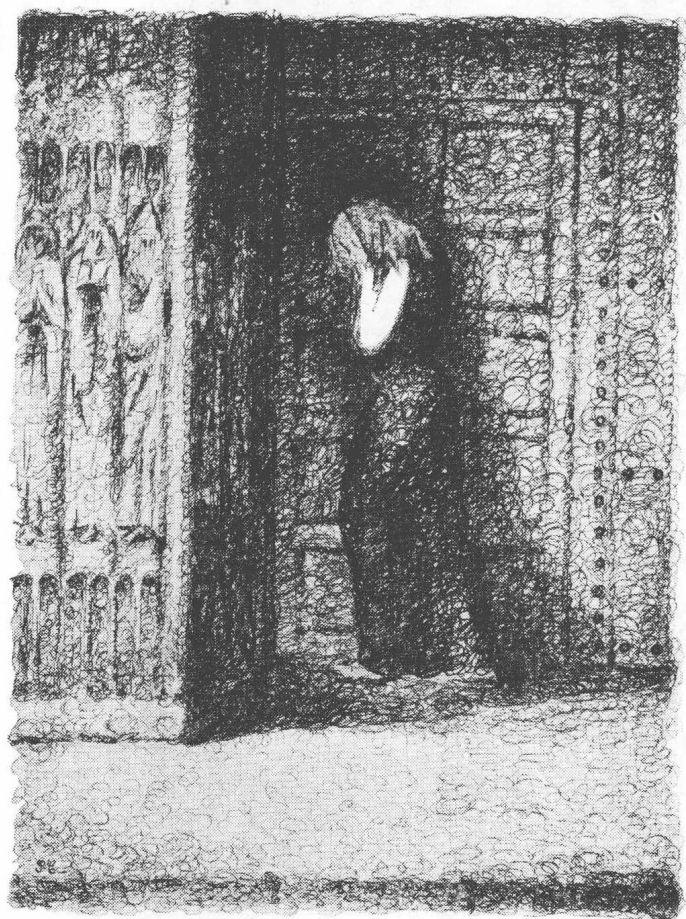
かの人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣をまとい、珈琲店に坐して客をひく女を見ては、往きてこれに就かん勇氣なく、高き帽をいただき、眼鏡に鼻をはさませて、プロシヤにては貴族めきたる鼻音にて物言ひ「レエベマ

ン」を見ては、往きてこれと遊ばん勇氣なし。これらの勇氣なければ、かの活潑なる同郷の人々と交わらんようもなし。この交際のうときがために、かの人々はただ余を嘲り、余を嫉むのみならず、また余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪えんざいを身に負いて、暫時の間に無量の艱難えんなんを閲しつくす媒なりける。

ある日の夕暮なりしが、余は猷苑きゆうえんを漫步して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、わがモンビシユウ街の僑居きゆうきよに帰らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余はかの燈火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上的木欄もくらんに干したる敷布、襦袢じゅはんなどまだ取り入れぬ人家、頬髭ほひげ長きユダヤ教徒の翁が戸前にたたずみたる居酒屋、一つの梯はただちに楼に達し、他の梯は害住まいの鍛冶が家に通じたる貸家などに向いて、凹字の形に引つこみて立てられたる、この三百年前の遺跡を望むごとに、心の恍惚こうこうとなりてしばしたたずみしこと幾度なるを知らず。

いまこのところを過ぎんとするとき、とざしたる寺門の扉に倚りて、声をのみつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。かむりし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つきよぐれたりとも見えず。わが足音に驚かされてかえりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く



清らにて物問いたげに愁いを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛におおわれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深きわが心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き歎きにあいて、前後をかえりみるとまなく、ここに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えずそばに倚り、「何故に泣きたもうか。ところに繫累なき外人は、かえりて力を借しやすきこともあらん」といいかけたるが、われながらわが大膽なるにあきれたり。

彼は驚きてわが黄なる面をうち守りしが、わが真率なる心や色にあらわれたりけん。「君はよき人なりと見ゆ。彼のごとく酷くはあらじ。またわが母のごとく」しばし涸れたる涙の泉はまたあふれて愛らしき頬を流れ落つ。

「われを救いたまえ、君。わが恥なき人とならんを。母はわが彼の言葉に従わねばとて、われを打ちき。父は死にたり。明日は葬らではかなわぬに、家に一銭の貯えだになし」

あとは歎歎の声のみ。わが眼はこのうつむきたる少女のふるう項にのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、まず心をしずめたまえ。声をな人に聞かせたまひそ。ここは往来なるに」彼は物語りするうちに、覚えずわが肩に倚りしが、この時ふと頭をもたげ、またはじめてわれを見たるがごとく、恥じてわ

がそばを飛びのきつ。

人の見るが厭わしさに、早足に行く少女のあとにつき、寺の筋向いなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これをのぼりて、四階目に腰を折りてくぐるべきほどの戸あり。少女は鑢びたる針金の先きをねじ曲げたるに、手をかけて強く引きしに、中には咳枯れたる老嫗の声して、「誰ぞ」と問う。エリス帰りぬと答うる間もなく、戸をあららかに引きあけしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦のあとを額にしるせし面の老嫗にて、古き獸綿の衣を着、よごれたる上靴をはきたり。エリスの余に会釈して入るを、かれは待ちかねしごとく、戸をはげしくたて切りつ。

余はしばし茫然として立ちたりしが、ふとランプの光にすかして戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬという少女が父の名なるべし。うちには言い争うごとき声聞えしが、また静かになりて戸は再びあきぬ。さきの老嫗は慇懃におのが無礼の振舞いせしを詫びて、余を迎え入れつ。戸のうちは厨にて、右手の低き窓に、真白に洗いたる麻布をかけた。左手には粗末に積み上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、うちには白布をおおえる臥床あり。伏したるはなき人なるべし。竈のそばなる戸を開きて余を導きつ。このところはいわゆる

「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向いて斜めにさがれる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭のつこうべきところに臥床あり。中央なる机には美しき氍毹をかけて、上には書物一二巻と写真帖とをならべ、陶瓶にはここに似合わしからぬ価高き花束を生けたり。そがかたわらに少女は羞をおびて立てり。

彼はすぐれて美なり。乳のごとき色の顔は燈火に映じて微紅をさしたり。手足のかぼそくたおやかなるは、貧家の女に似ず。老嫗の室を出でしあとにて、少女は少し詭りたる言葉にていう。「許したまえ。君をここまで導きし心なさを。君はよき人なるべし。われをばよも憎みたまわじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思いしシヨウムベルヒ、君は彼を知らでやおわさん。彼は『ウィクトリア』座の座頭なり。彼が抱えとなりしより、はや二年なれば、事なくわれらを助けんと思ひしに、人の憂いにつけこみて、身勝手なるいいがけせんとは。われを救いたまえ、君。金をば薄き給金をさきて還し参らせん。よしやわが身は食わずとも。それもならずば母の言葉に」彼は涙ぐみて身をふるわせたり。その見上げた目には、人に否とはいわせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、またみずからは知らぬにや。わが隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それにて

足るべくもあらねば、余は時計をはずして机の上におきぬ。「これにて一時の急をしのぎたまえ。質屋の使いのモンビシュウ街三番地にて太田と尋ね来ん折りには価を取らずべきに」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のためにいだしたる手を、唇にあてたるが、はらはらと落つる熱き涙をわが手の背にそそぎつ。

ああ、何らの悪因ぞ。この恩を謝せんとて、みずからわが僑居に來し少女は、シヨオープンハウエルを右にし、シルレルを左にして、ひねもす兀坐するわが読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。このときをはじめとして、余と少女との交わりようやくしげくなりもて行きて、同郷人にさえ知られぬれば、彼らは速了にも、余をもて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。われら二人の間にはまだ痴騷なる歓樂のみ存したりしを。

その名をささんは憚りあれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余がしばしば芝居に出入りして、女優と交わるといふことを、官長のもとに報じつ。さらぬだに余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、ついに旨を公使館に伝えて、わが官を免じ、わが職を解いたり。公使がこの命を伝うるとき余にいいしは、御身もし即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、もしなおここに在らんには、公の助けをば仰ぐべからずとのこ

となりき。余は一週日の猶予を請いて、とやこうと思ひわざらううち、わが生涯にてもっとも悲痛を覚えさせた二通の書状に接しぬ。この二通はほとんど同時にいだししものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、わがまたなく慕う母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をここに反覆するに堪えず、涙の迫り来て筆の運びを妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、このときまではよそ目に見るより清白なりき。彼は父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五のとき舞の師のつりに応じて、この恥ずかしき業を教えられ、「クルズ」果ててのち、「ウイクトリア」座にいでて、いまは場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハックレンデルが当世の奴隸といしごとく、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にてつなされ、昼の温習、夜の舞台ときびしく使われ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧い、美しき衣をもまて、場外にてはひとり身の衣食も足らずがちなれば、親はらからを養うものはその辛苦いかにぞや。されば彼らの仲間にて、いやしき限りなる業におちぬは稀なりとぞいうなる。エリスがこれをのがれしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とによりてなり。彼は幼きときより物読むことをばさすがに好みしかど、手に入るは卑しき「ゴルポルタージュ」と唱うる貸本屋の小説のみなり

しを、余と相識るころより、余が借しつる書を読みならいて、ようやく趣味をも知り、言葉の詭りを正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤り字少なくなりぬ。かかれば余ら二人の間にはまず師弟の交わりを生じたるなりき。わが不時の免官を聞きしときに、彼は色を失いつ。余は彼が身のことにかかわりしを包み隠しぬれど、彼は余に向いて母にはこれを秘めたまえといひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知りて余をうとんぜんを恐れてなり。

ああ、くわしくここに写さんも要なけれど、余が彼を愛する心のにわかに強くなりて、ついに離れがたき中となりしはこの折りなりき。わが一身の大事は前に横たわりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行いありしをあやしみ、また誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、はじめて相見しときよりあさくはあらぬに、いまわが数奇を憐れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しき、いじらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせん。公使に約せし日も近づき、わが命はせまりぬ。このまゝにて郷にかえらば、学成らずして汚名を負いたる身の浮かぶ瀬あらじ。さればとてとどまらんには、学資を得べき手だてなし。